

街

宮本百合子

青空文庫

一

一九一七年に、世界は一つの新しい伝説を得た。「ロシア革命」。當時、そのロシアに住んでいた者は、物心づいた子供から、老耄ろうもうの一つ手前に達した年寄りまで、それぞれ一生の逸話アネクドートを拾つた。逸話は、いかにもこの国風な復活祭の卵のように色つきで、或る者のは白、或るもののは緑、或る者のは真赤だ。

レオニード・グレゴリウイツチ・ジエルテルスキーはやつと商業学校を出たばかりの青年であった。彼の父親は小さい町の工業家で、革命の時、理由あってか、多くの間違いのうちの一つの間違いによつてか殺されて、河の氷の下へ突込まれた。ジエルテルスキーは、それから、母親を五日鶏の箱へ詰めた経験、真直自分の額に向けられた拳銃の筒口を張り飛したので、銃玉たまが二月の樺の木の幹へ穴をあけた陰気な光景などを、彼の逸話として得た。

一九二九年、ジエルテルスキーは彼の東京で二度目の冬を迎えた。勤めている或る週刊新聞社は、赤坂の電車通りに面して建つていた。水色のペンキで羽目板を塗り、白で枠を

取つた二階建ての粗末なバラツクであつた。階下が発送部で、階上が編輯室だ。誰かが少し無遠慮に階段を下りると、室じゅうが震えるその二階の一つの机、一台のタイプライターを、ジエルテルスキイは全力をつくして手に入れたのであつた。

薄曇りの午後、強い風が吹くごとに煙幕のような砂塵が往来に立つた。窓硝子ガラスがガタガタ鳴つた。洋袴ズボンのポケットへ両手を突こみ、社長が窓から外を眺めていた。

「フツ！ 何という埃ほこりだ。——こんなやつあニガリ撒いた位じや利かないもんかな」

「…………」

誰も返事しなかつた。編輯員の一人は、片手で髪を引っぱりながら熱心に露文和訳をしていた。向いの机で、邦字新聞から経済記事を他の一人が抄訳している。黒ビロードのルパシカを着たジエルテルスキイは、最も窓に近い卓子で露文新聞を読んでいた。彼は、社長の独言から、何という埃だ。利かないもんかな、などと云う言葉を理解した。小心なジエルテルスキイはその場合、一番彼に近くいる位置の関係から云つても、何とか一言親しみある言葉を与えたかつた。然し、彼には適當な日本語が見つからない。——つまり彼も黙つて、タイプライターを打ち始めた。

「最近地方図書館は著しき発達を遂げた。現在に於て地方図書館の数は六千五百を数えら

れている」

外の往来をトラックが通るひどい音がし、ブルルル新聞社の建物全体が震動した。一人が思い出したように立つて、室の隅の水道栓のところで含漱を始めた。社長は次の室へ去つた。――

階子口のところへ、給仕娘の顔が出た。

「ジエルテルスキーさん、御面会ですよ」

「だれですか？」

「御婦人の方がお二人で下に待つていらっしゃいます」

ジエルテルスキ一は長い椅子からたちながら、金髪をかき上げ、水のような碧い眼あおいだを訝いぶかしげに動かした。柱時計は二時十五分を示している。ジエルテルスキ一は、靴くつをはいた足の長さの三分の一は確にあまる浅い階子段はしじを注意深く下りて行つた。

「来ます？」

「ええ直ぐいらつしやいます」

腰をかがめてその声の方を覗き、ジエルテルスキ一は意外さと漠然とした当惑とで、

「おお」

蒼白い顔を少し赧らめた。^{あか}再び金髪をかき上げる暇もなく、彼はブーキン夫人の有名な饒舌に捕まつた。

「ああ、レオニード・グレゴリウイツチ！　お目にかかるて何て仕合せだつたんでしよう。さ、どうか早く下りて来て私共の相談相手になつて下さい」

交際で、ジエルテルスキーはもうブーキン夫人を取扱うこつ心得ていた。彼は、内気そうな、同時に頑固そうなところもある微笑を浮べながら、先ず黙つて、さし出された対手の手を握つた。

「いかがです」

次に彼は、^{かたわら}傍に立つてゐる、太つたマリーナ・イワーノヴナに挨拶した。いつも傲然と胸をつき出し、ジエルテルスキーを子供扱いにしてゐるマリーナ・イワーノヴナが、今日はどうしたことが、彼の挨拶に、うなずいて答えるのだけがやつとらしい有様であつた。それを、ブーキン夫人が尤もだ、尤もだというように、吐息をついて眺めた。

「ねえ、レオニード・グレゴリウイツチ、マリーナ・イワーノヴナが何ともお氣の毒なことになりましてね、私、御相談を受けて友達甲斐にお見捨てすること出来なくなつたんですよ、マリーナ・イワーノヴナ、よくレオニード・グレゴリウイツチに事情をお話しなさ

「いませよ、若い人の心は寛大だから、きっと貴女の御満足の行くように計らつてお貰いになれますよ」

発送掛の小僧や事務員、さつきの給仕娘まで今は一斉に仕事をやめ、深い好奇心に輝いて、ジエルテルスキー自身にもまだ訳の分らない話を眺めている。彼は、

「失礼ですが、此方に椅子がありますから」

と、二人の女を応接間に通した。がらんとした白壁の裾には、荒縄で束つた日露時報の返品が塵にまみれて積んである。弾機もない堅い椅子が四五脚、むき出しの円卓の周囲に乱雑に置いてあつた。その一つを腰の下に引きよせるや否や、ブーキン夫人は新しい勢いで云いだした。

「レオニード・グレゴリウイッチ、どうか貴方、可哀そうなマリーナ・イワーノヴァの忠実な騎士になつて上げて下さい、ね、お拒みなさりはしませんわね」

ジエルテルスキーは、黒い洋袴ははを穿いた脚を組みながら、丁寧に碧い眼を見開いて対手を見守つた。

「失礼ですが、夫人、私はまだちつともお話の内容がわからないんですが」

「まあ本当に！ 私、いつも熱中するところなんですの、そしては宅に驢馬ろばつていわれる

んですの——ホツホホホ」

何故この夫人ばかりは、ナデージュタ・ペトローヴナと呼ばれず、マダム・ブーキンと云うのか誰も理由を知らなかつた。

彼女は名刺にマダム・ブーキンと刷らせた。ジエルテルスキーが、上海で始めて彼女に紹介された時、彼女は、何か特種な称号でも云うように、

「ええ、私マダム・ブーキンと申しますの、どうぞよろしく」

と紅をさした頬で微笑^{わら}つた。髪の黒い、黒い眼のキラキラした瘦せぎすの彼女にとつて、マダム・ブーキンというのは頬に紅をさすのと同じに、一つの趣味に過ぎないのだろう。ジエルテルスキーは、蒲田でこの夫人の若い愛人になつたことがあつた。——撮映されたのだ。——

非常に豊富な間投詞と詠歎との間からジエルテルスキーが得た知識は、マリーナ・イワーノヴナが、夫のエーゴル・マクシモヴィイッチと激しい夫婦喧嘩をしたこと、その原因はエーゴル・マクシモヴィイッチがマリーナから借りて返さない三百円の金にあること、もう二度と帰らない決心で家を飛び出して來たと云う事実であつた。

「もう絶望のどん底で私のところへ今朝いらつしつたんですの、一緒に泣いてしまいまし

たわ。ねえ、マリーナ・イワーノヴァ、私も女ですよ、あなたの辛いお心がひとつ」とは思えませんわ。——それでね、レオニード・グレゴリーウィツチ、お願ひと申しますのはね、あなた当分、この不幸な方を保護して上げて下さいませんこと?」

ジエルテルスキーは、咽喉仏のどぼとけを引き下げるようにして低い声で答えた。

「私の力にかなうことなら悦んでお力になります」

が、そう云い終ると同時に、彼の艶のない白っぽい眉毛の生えた額際を我にもあらず薄赧くした。たつた一間しかない住居のこと、彼の衣嚢ポケットにある一枚の十円札のことなどが、瞬間彼の頭を掠めたのであつた。

彼が赧くなると、マダム・ブーキンも一寸上気しながら、大仰に吐息をついた。

「私、出来ることなら切角来て下すつたんですもの、家へ幾日でもいていただきたいと思いますわ。どんなにまた仕合せにおなりになるまで、傍にいて慰めてお上げしたいでしょう。——でも……」

マダム・ブーキンは若い娘のような身振りで膝の上に擦れた手提袋の紐を引っぱつた。

「ああ、みんな元のようではないんですけどね、それに私のところには小さいものもいますし——」

ジエルテルスキーは、これまで下手にばかり自分の身を置いてつき合つて来た二人の年長の女たちの間に挟まれ、進退谷きわまつた。彼は、二人のどちらにも、世話と云えば世話になつたことがあるのであつた。マダム・ブーキンは彼女の映画会社へ、餓死しそうになつていた彼を紹介して呉れた。マリーナ・イワーノヴナは夫婦とも裁縫師で、ジエルテルスキーは妻のための内職を、マリーナ・イワーノヴナのところから貰つて來ていた。今もいる。——恐らく彼が、片手でルパシカの胸を抱え、右手で頻りに金髪を撫でつつ、決心しかねてゐる今の瞬間、若いダーシエンカは、手ミシンを廻しながら、子供服の袖でもつけているであろう。

マリーナ・イワーノヴナは、殆ど一口も物を云わないでかけていた。物を云つたら太つた体じゅうの悲しみと絶望が爆発するのを恐れて唇を結んでいるようであつた。ただ、目をはなさずジエルテルスキーの顔を見守つた。何とつよく見ることだ。充血した二つの目と蒼黄色く荒れた二つの頬とで、彼女は答を待つてゐる。——マダム・ブーキンもすべて云うだけの事は云つてしまつた。そして、彼の口許を見た。——ジエルテルスキーは、そのように押しづよい女の四つの目で見つめられる自分の口許に髭の無いことが、変に気になつた程、沈黙は脅威的であつた。彼は遂に、

「では兎も角とかく私の家へお伴しましよう」と云つた。

「ダーリヤ・パヴロヴナに一度都合をきいて見ませんとどうも——若し彼女にさしつかえ
ないようだつたら、勿論私共は悦んでお宿致します」

マダム・ブーキンはちらりと素早い流晒ながしめをマリーナに与えた。が、気落ちしているマ
リーナ・イワーノヴナはそれを捕えず、ただジエルテルスキーが家へ行こうと云つたのを
だけ理解したように、重々しく椅子から立ち上つた。

二

数カ月のうちに母親になろうとする体のダーリヤ・パヴロヴナは、狭い部屋の中を悠ゆつ
り隅から隅へ歩いていた。レオニード・グレゴリウイツチが電車賃を節約するために勤め
先と同じ区内にこの貸間を見つけたのであつた。主人は請負師であつたが、この男は家に
いない。妻らしい女も見えなかつた。階下には六畳、三畳、台所とある、日光のよくささ
ないところに六十余の婆と六つばかりの女の児が生活していた。

往来に面した窓の外を、ここでも今日は砂塵が、硝子を曇らして舞い過ぎた。ダーリヤは自分独りの時は石油ストウブを燃かないと云っていた。それ故室内は暖かではない。然し、決して居心地悪い場所とは云えなかつた。窓には白地に花模様の金巾カナキンのカーテンが懸つていた。一畳ばかりの勝手を区切る戸の硝子は赤い木綿糸でロシア式刺繡をした覆いがかかつてゐるし、二階から上つて来る、ジエルテルスキ家の入口である襖の左右にも、アーチのように、海老茶色に白でダーリヤの花の模様あるメリーンス布が垂れ下つていた。柱にかけた鏡の上に飾つてあるバラの造花、ビール箱を四つ並べた寝台の頭上の長押なげしに、遠慮深くのせられてある三寸ばかりのキリストの肖像。——それ等は、悠々く、隅から隅へ歩いてゐるダーリヤのやや田舎風な、にくげない全体とよく調和していた。レオニード・グレゴリウイツチはひどく背が高い。ダーリヤも二寸位しか低くなかった。そして同じように、余り艶のない金髪である。

——二十度近くも室内散歩を繰返えすと、ダーリヤは、窓の前の卓子へ戻つた。その辺の置へ、細かい羅紗の裁ち屑が沢山散らばつていて。彼女はさつきまで子供外套の裁断をしていたのだ。産科医の注意で、彼女は一日のうちに幾度かそうやつて、かけていれば立つて歩く、たつていればかける、或は体を長くのばして横わる。いろいろ姿勢をかえる必

要があるのであつた。それが書き物机にもなるし食卓にもなる机から布をかたづけているうちに、ダーリヤは少し疲れを覚えた。頬杖をつく。——風が吹きすぎる毎に思わず顰め顔をしながら外の景色を眺める。バラツクのスレートの屋根屋根、その彼方に突立つ葉のない巨大なる焼棒杭^{やけぼうくい}のような樹木。……遠くの物干へ女が出て来て、真白なシイツらしい布を乾した。女は去る。風が吹く。白い洗濯物は気違ひのようにはためいた。曇つた空とその砂塵の中では真白い一枚の布は何かを感じていて動く。ダーリヤ・パヴロヴナは、ぼんやりした一種の物思いに捕われた。それは悲しみではないし、苦しみとまで鋭いものでもない。何か広い、果しない、目的の定まらないものの中に混りこみ、生きている自分達——そんな感じだ。いろいろな場所で種々な習慣言葉を持つ民衆の中に生活して来たダーリヤは、東京で、不便な言葉で、その上きりつめて暮さなければならないことに驚きはしなかつた。レオニード・グレゴリウイツチが彼女の夫であると同じそれは不变の事実だ。ああ、リヨーニヤ！ ダーリヤ・パヴロヴナの素朴な顔はその名に燃える。彼と、今自分の体の中で次第に重く、何とも云えぬ可愛いさで重く重くと育つて来る嬰兒^{えいじ}に向つて、彼女の心臓は打つてゐる。

「神よ、護り給え——」

然し、愛するリヨーニヤと自分の可愛い可愛い子と三人の暮し、その行末——その先の行末——。ダーリヤの妻から母になろうとする若い胸には、こう考えて来ると、いつも、永久に消え去る一条の煙の果を眺めるような当途あてどもない心持が湧くのであった。彼女には、レオニード・グレゴリウイツチがこれ以上立身をして、自分達の生活に変りが起らうとも思えなかつた。一生のうちに、また故郷の草原を見、丸木小屋に坐つて温まつて来る壁の匂いをかぐ懐かしい冬の夜にめぐり合うことも無いであろう。それでも、生活は続いていれる。自分達の死んだ後、けれども、国籍をも持たぬ子孫は、どこで、どうやつて生きるであろうか。彼等の生活も、自分達二親の生活がそうであるように、苔のように根のついたところで、根を切られぬ限り、その日その日つづいていくのである。然し、自分達の墓のある土地で彼等が生きつづける——どうしてそんなことが夢見られよう！　ダーリヤ・パヴロヴァナ自身にさえ、彼女の一生は地球儀のどの色で塗られていく場所で終るのか、予想もつかないではないか。地球の面の広さ、そこに撒かれた自分達の生活の何とも云えず拠りどころなき立場——。ダーリヤ・パヴロヴァナは、今日のような曇つた空の下によせている一つの海を想い出した。

彼女は敦賀行汽船の最低甲板から海を眺めていた。海はあの埃をかぶつたスレート屋根

の色をしていた。タブ……タブ……物懶く海水が船腹にぶつかり、波間に蕪、木片、油がギラギラ浮いていた。彼方に、修繕で船体を朱色に塗りたくられた船が皮膚患者のように見えた。鷗がその檣のまわりを飛んだ。起重機の響……。

ダーリヤの、どこまでも続く思い出を突然断ち切るように、階下で風に煽られたように入口が開いた。

「あら、これ、家の娘さんですの、俐口そうな眼つきだこと……何ていう名なのお前さん」「我々の言葉を理解しないんですよ、ちつとも」

レオニード・グレゴリウイツチのそれは声だ。ダーリヤは、いそいで階子口の襖を開けて下を覗いた。ブーキン夫人が真先に靴をぬいで階段に足をかけ、彼女に向つて身振沢山に手を振った。

「おお、おお、あなたは本当に仕合せものよ、可愛いダーシエンカ！　こんな天気に外を歩いて来て御覧なさい」

次いで、マリーナ・イワーノヴナ、最後にジエルテルスキイの長い脚が、左右、左右、階段の上に隠れるのを見届けると、下の小さい娘は自分達の部屋へかけ込み、息を殺して、「お婆ちゃん、三人、異人さん」

と報告した。

三

長火鉢をはさんで姪の志津と話し込み、せきは孫の報告をききつけなかつた。

「だからさ、そりや私のるさんの覚悟が悪いって云つたのさ。義理にもせよ阿母さんだと思えばこそ、善ちゃんが自分の稼ぎで寒いめもさせないんだからね。孫の看病位お前⋮⋮」

「おばあちゃん！」

うめは、祖母の黒繻子の衿にハンケチをかけた肩にもたれかかつて押した。

「三人ですつてば、異人さん」

「分りましたとさ」

長火鉢の向う側から、志津が云つた。

「いい門番さんがいるのねえ、おばあさんとこ」

せきは、長火鉢の縁で煙管をはたき、大人の女でもみるような風に六つの孫娘をじろり

と見た。

「おかしな子つたらないのさ、異人さん異人さんって大騒ぎさ。もうちつと大きかつたら
とんだ苦労だ」

「ふふふ、まさか!——珍しいんだわねえ、うめ坊」

うめは、祖母の横に坐り、上眼づかいで伯母を見上げながら、につとはにかみ笑いをした。おかっぱで、元禄の被布を着て、うめは器量の悪い娘ではなかつたが、誰からも本当に可愛がられることのない娘であった。蒼白い顔色や、変にませた言葉づかいが、育たないうちにしなびた大人のような印象を与えた。年寄りの祖母に、遊び仲間もなく育てられているうちに、うめは、六つで、もう年寄りになりかけているのであつた。志津は、甘えて横座りしているうめを愛情と焦立しさの混つた眼で眺めながら、

「うめちゃん、何て名? お二階の異人さん」

と訊いた。

「ジエリさん」

「——本当? お菓子みたいな名なんだねえ」

「違うんだよ、ジエル何とか云うんだそうだけえど、あんな長い名覚えられるもんじやあ

ない、名なんぞ呼ぶ用がありやしないよ」

「——二階に人がいると、でも淋しくなくつていいわ。そろそろ下駄片づけちゃどうせきは、薄い苦笑いを洩らした。いつか志津が遊びに来た時、

「まあ、どうしたのあの上り口の下駄つたら、何人家内です、こちらさん」と云つたことがあつた。するとうめが、とても声をひそめて伯母に説明してきかせた。「あの下駄はね、本当は誰にも云っちゃいけないんですけどね、わざと置いとくの。うち、おばあちゃんとうめだけで不用心だから」

志津は、田丸屋のかき餅をつまみながら、「いくらで貸してるの」と尋ねた。

「二十四円さ」

「おばあさん一人のお小遣いだもん結構だわ」

暫く黙つていたが、せきは軽^{やが}て、

「作も仕様のない人間さ」

と呟いた。仕事の為とは云いながら、小さい孫を押しつけて旅先に暮らすことの多い作造

に不満を抱いているのだろうと志津は思つた。全く、婆さんだけの家というのは、何故変に湿っぽいようで、線香のような煎薬せんやくのような一種の臭いが浸みついているのだろう。志津は、或る人の世話になつて、退屈勝な毎日を送つていた。他に身寄りもないのと、彼女は喋りに来るのであつたが、天気のどんなによい日でも、この長火鉢の前にいると戸外に日が照つていることを忘れてしまうようであつた。

「作さんも、おかみさん貰えればいいのに——」

「ふん——何してるんだか——なに、この家だつて、第一変てこれんな洋館まがいになんかしないで、小気の利いた日本間にしといて御覧、いくらバラツクだつて、この界隈のこつたもの、女一人位のいい借り手がつくのさ。——仕様がありやしない、半年も札下げとくの、第一外聞が悪いやね」

「だつて書生さんなんかより異人さんの方がよかないの、金廻りがいいそうだもの」

せきは、

「どうして！」

と、顔じゅう饗めて首を振つた。

「とてもだよ。出たり入つたりにうめの顔飽きる程見てたつて、キヤラメル一つ買って來

るじやないからね」

間をおき、更に云つた。

「第一、気心が知れやしない」

志津は、

「ほーら、そろそろおばあさんの第一が始まつた」と笑つた。

「本當だよ、嘘、だと思つたら見て御覽、我々なら大抵まあその人の眼つきを見りや、腹で何思つてるか位、凡^{およ}その見当はつくじやないか。二階の異人さん、こないだも私、どんな氣でいるのかさぐつてやれと思つて、台所へ水汲みに来た時、世間話してやつたのさ。喋りながら一生懸命眼を見てやるんだが——困つたねあのときばかりや、お前ただ変てこりんに碧いばっかりでさ——本当に——余り碧いんでおしまいにや氣味が悪くなつて引下つちやつた」

「ふふふふ、おかしなおばあさん、二階で嘆^{くしゃみ}してゐるわよ、今頃」

凝^じつと二人の話をきいていたうめが、その時、いかにもませた調子で、
「ちよつと！ 来ますよ」

と警告した。成程、誰かが階段を一段ずつ念入りに降りて来る跔音^{あしおと}がする。志津は、一

寸肩をすくめるようにして舌を出す真似をした。

「ふふふふ……」

婆さんも釣込まれて薄笑いしながら、新しい煙草をつめ始めた。うめは、障子の隙間から板敷を覗いている。その後姿を見、志津はやがて、

「あーあ

小さい欠伸あくびをしながら、

「もう何時？」

と云つた。

「日が短い最中だね、四時一寸廻った頃だろう」

うめが、二人の前に顔をさしつけて、

「女の異人さんですよ、よその」

と云つた。が、誰も答えず、志津が、立ち上つて腰紐を締めなおしながら、

「どう、おばあさんすしお鮓でもおうろうじやがないの」

と云つた。せきは、上の空で、

「そうさねえ」

と応じながら、熱心に志津の八反の着物や、藤紫の半襟を下から見上げた。

「——その着物、さらだね」

「おばあさんにや、十度目でもさらだから始末がいいわ——ね、本当にどうする？ 私これからかえつたつて仕様がないから、冷たくつてよかつたらお鮓でも食べようじゃないの」「いつもお前にばっかり散財かけてすまないようだね」

「水臭いの。——じゃ一寸云つて来るわよ」

「ごたごた、主のない下駄まで並んでいる上り口で、自分の草履をはきながら、志津は珍らしそうに、そこにぬいである女靴を眺めた。

「まあ、細い靴、よくあの体でこんな靴はけるもんね」

「子供んちから締めてあるのさ——見かけばかりでは仕様がありやしないよ」

せきは、軽蔑するように囁いた。

「はばかりから出ても手を洗うこと一つ知らないんだからね」

「——いい塩梅に風が落ちた……」襟巻をきゅっと引きつけ志津は街燈のついた往来へ出て行つた。

明るい冬の日光が窓からさし込んで室内に流れた。土曜日だ。もう往來で遊んでいる子供の声が、彼等の二階まで聞えた。ダーリヤ・パヴロヴナはゆつたり長い膝の上に布をたぐめて、縁とりをしている。向い側に、髪をもしやもしやにしたままのマリーナ・イワーノヴナが茶色のスウェタアに包まれ、頬杖をついてダーリヤの指先の動きを眺めていた。彼女の前に、白と桃色の毛糸で編みかけの嬰児帽が放り出してある。彼女がこの二階に来てから五日経つた。ダーリヤも、マリーナも、その五日を実にはつきり数えて過して来たのだ。――

「アーニヤ、何ぐずぐずしているんだろう」

マリーナが、その日何度もぶつぶつ云い出した。

「あの娘には、どんなに教えたつて物を手取早くするということが解らないんだから――エーゴルの姪に違いないわ」

ダーリヤは落付いた調子で答えた。

「子供ですものまだ何と云つたつて――でも本当に年より役に立っていますわ」

マリーナは朝から、養女のアーニャが麻布の夫の家から使に来るのを待つてゐるのであつた。

「私に充分正当の理由のある衝突でこうやつてゐるのに、顧客とくいまで失くしちゃいらねえわ、ねえ」

彼女は、自分のところへ来た注文はどんな小さいものでも、洩れなくアーニャにダーリヤの二階まで運ばせた。彼等夫婦の間には他人の理解出来ない特別の諒解があると見え、そんな持続的の喧嘩をしつつ、エーゴル・マクシモヴィツチの方も、妻の稼ぎに対しても咳払い一つしないらしかつた。そんなことは、ダーリヤの常識には変に思えた。喧嘩が本気なのかどうか疑わしい心持になつた。マリーナにとつても、夫のそういう態度は不満であつた。自分一人の口過ぎさえしていれば、エーゴル・マクシモヴィツチにとつて自分はどこに暮していようとかまわない存在なのか。三百円返す気はないのか。異様な不安が、彼女の厚い、ややじだらくな胸を搔き廻すのであつた。ダーリヤは、彼女の自信のない心の底を見透して、或る時は哀れに、或る時は若い女らしい皮肉を感じた。けれども、何も見ないつもりにしている。マリーナも、それについては沈黙を守つてゐる。騒ぎやのマリーナ・イワーノヴナに對して、ダーリヤはひそかに自分の平静な氣質に誇りさえ感じてゐる

のであつた。

ダーリヤが、縁取りの三分の二も進んだ頃、やつと下で、
 「叔母さん」

と呼ぶ、アーニヤの細い、神経質な声がした。

「やつと來た！」

ずしり、ずしり降りてゆき、マリーナが、

「迷兎にでもなつたんだろう？ 馬鹿だから……ふーむ、まあいい、いい。——それで？」

切れ切れに云う声が聞える。突然彼女は大声で笑い出した。

「ハハハハ何でおかしいんだろう！ ダーシエンカ！ まあ一寸来てこの様子を御覧」

その叫びで、十三の瘦せて雀斑そばかすだらけのアーニヤは、生え際まで赧くなつた。彼女は憤つたように垂髪おさげを背中の方へ振りさばいて、叔母を睨んだ。彼女は、リボンのかわりに叔母の裁ち屑箱から細い紫繻子サテンの布端きれはしを見つけ出した。彼女はそれを帽子を買って貰えない栗色の垂髪の先に蝶々に結び、道々も掌ての上で弾ませながら歩いてきたのであつた。

「どんだお嬢さんだね、ハハハハハ貴女の親切な叔父さんが似合うと仰云いましたか？」
 例によつて、入口が開くと同時に顔を出したうめが、階子のかげから異常な注意をあつ

めて、この光景を観ていた。アーニヤの色艶のない小さい顔が泣きそうに赧くなる。元通りそれが白くなる。やがて、片脚をひょこりと後に引く辞儀をして土間から出て行く迄、うめは動物的な好奇心とほんやりした敵意とを感じながら見守つた。

「どうでした？」

マリーナは答えのかわりに、両腕を開いて見せた。当にしていた注文が流れたのであつた。彼女は、元の椅子にかけた。が、

「あああ」大きな吐息をついた。

「あんたなんぞ本当に仕合せだわ、ねえ、ダーシエンカ、ちゃんとリヨーナにたよつて暮していられるんだもの。私なんぞみじ惨めなものだ、仕事がなくなつて御覽なさい、どうして生きられて？」

「だつて——貴女お金持じやありませんか」

何心なく云つたダーリヤの言葉は、思いがけない反響を呼び起した。マリーナは、「ね、後ごしょう生しうだからダーシエンカ」

心臓でも搾しづられるように云つて、ダーリヤの手頸を捕え、自分の胸に押しつけた。

「どうか私がただの吝嗇坊しわんぱうで、お金のことをやかましく云うのだと見下ないで下さいね

? 私あなたがたが黙つても心でさぞ賤いやうな女だと思つてゐるだらうと思うとともに辛いの。ね！ ダーシエンカ、親切なダーシエンカ、あなただけは私を分つてくれるでしょう？」

ダーリヤは唐突真情を吐露された間の悪さと一緒に少なからず心を動かされた。

「それは、マリーナ、あなたにはあなたの十字架があるのはお察ししています」

マリーナは嬉しそうにダーリヤを見て合点合点をした。

「本当にそうよ、十字架！——ね、ダーシエンカ、あなたにはまだまだ私位の年になつた女がどんな恐しい心持で将来を見るか想像も出来やしないわ。保護して呉れる国もない、若さもない、夫もない。——エーゴルは、死んだつて、生きかえつた時を心配して墓まで金を縫い込んだ襯衣シャツを着て行く人ですよ——ああ、その時のことを想つて御覧なさい。何が力？ その時死から私を守つて呉れるのは金だけですよ、その金も、もう新しく蓄められる金ではない、一哥カペイカずつ消えて行く金、二度と我が家にはとりかえせない金です。私はその一哥を出さなければならぬ時の恐しさが今からありあり、目に見える程わかつている。——だからね、ダーシエンカ、三百円は、私にとつてただの金ではないんですよ、命の一部分なの、それを、ね、ダーシエンカ、そんな思いでためてゐる金を、私より技量うで

のある、丈夫なエーゴルに騙りかたとられて黙つていられるでしようか、ね、ダーシエンカ」

ダーリヤは思わず優しく静脈の浮き上った指先の短いマリーナの手を撫でた。

「きっと今にエーゴル・マクシモヴィツチはお返しなさいますよ、ただ約束の日にかえせなかつたというだけですよ」

「——エーゴル・マクシモヴィツチは、どうしてああ慾張りなんでしょうねえ、私が殺すと思つてこわがるなんて——ダーシエンカ、あのひとは、アーニヤに飲ませてからでなけりや珈琲コーヒーも飲まないんですよ」

それは、エーゴル・マクシモヴィツチの家庭を知つている者の間に評判の事実であつた。

五

「エーゴル・マクシモヴィツチだつて、元からあんなではなかつたのにねえ」

マリーナは、追想に堪えぬように云つた。

「私共だつて、あんた方のように若い気軽な夫婦だつた事もあるのよ、ダーシエンカ。大きな裁板たちいたの前でエーゴルが裁つ。私が縫う。これにエーゴルが仕上をして顧客へ届ける。

少しづつお金をためる。飾窓へやつと一つ着付人形を買う——あの時分の楽しかったこと……その時分からエーゴルはマンドリンが上手くてね、町で評判だつた。自分が弾いては私によく踊らせたもんだわ。……そうこうしてやつとまあ食うに困らない目当がつくようになつたかと思うと、どう？ 機関銃が兵隊と一緒に家へ舞い込んで来た。『貴様等は出ろ！ 倭達が今日からこの主人だ』

マリーナの、下瞼の膨れた眼に涙が滲み出た。

「世の中のこととは、何だつて訳なしに起るもんじやないから、店位とられたことは私も諦めますさ、自分の知らない罪で雷に打たれて死ぬ人さえあるんだものね。でも、私たつた一つ諦められないのは、エーゴルをあんな恐しい男にしてしまつてくれたことよ、ダーシエンカ。……元を知つている私にはやつぱり離れられない……私共はね、ダーリヤ・パヴロヴナ、二十二年一緒に暮して來たんですよ……」

しんみりしたマリーナの話をきいているうちに、ダーリヤはこれまで知らなかつた深い悲しみがマリーナの心にあるのを知つた。彼女はそうとも知らず他の友達と茶をのみながら、

「さ、アーニヤ、お前のみなさい」

「はい、叔父さん」

エーボル・マクシモヴィツチと哀れな姪の真似をして大笑いした自分達を私に恥じた。
ダーリヤは、真心から動かされて、対手の手を執つた。

「マリーナ・イワーノヴァ、だれもあなたがそんなに悲しい方だとは知らないでしよう、
きっと。——若し、私、あなたに思いやりのないことをしていたら許して下さいね」

マリーナは、合点合点をし、ダーリヤの滑らかな血色のよい頬を情をこめて撫でた
た。

「可愛いダーシエンカ、あんたは優しいいい娘さんですよ、——どうか立派な児供が生
れますように」

妊娠のために感じ易くなっているダーリヤはマリーナを擁きしめたい程感動した。彼女
は、立つて室内を歩き出した。マリーナは吐息をつき、頭を振り、編物をとり上げた。往
来に遊んでいた子供はどこへか去り、あたりは暫く静かであつた。向い側の店々が正面か
ら午後の斜光を受けている。ダーリヤが窓のそばへ歩きよる毎に、日除けの下に赤い工ナ
メルの煙草屋の商牌しょうばいが下つていて見えた。タバコ。コバタ。バタコ。——それは
色々に読むことが出来た。——

三時過て、レオニード・グレゴリウイツチは勤め先から帰つて來た。先ず帽子を脱ぎ、
マリーナ・イワーノヴナに挨拶をし、彼は、ダーリヤの手ミシンの蓋をはずして畳に立て、
跨またがつた。彼等の生活には、椅子が二脚しかないのであつた。ダーリヤは茶の仕度に立つた。

「どうです？　何か面白いことでもあります？」

金髪をかき上げながら、ジエルテルスキーは喉音で、

「なんにも。毎日同じ顔——同じ仕事です」

と答えた。彼は妻だけであつたら、その後へ、

「相変らず碌なことはない」

とつけ加えたかつたのを堪えたのだ。今日、昼食を食べて煙草を吸つていると、不意に松崎が上つて來た。

「やあ、どうです、やつてますね」

編輯員の誰彼に愛嬌を振りまきつつ、彼はジエルテルスキーの机の横へ椅子を引張つて來た。

「大分暖いですね、今日は。奥さんお達者ですか？　一寸通りかかつたもんで、どうして
いられるかと思つてね」

松崎はちらちらジエルテルスキーガタイプライターで打ちかけている草稿を覗いたり、積みかさねてある新着の露字新聞を引き出して目を通したりしていたが、「ああ、近頃何でもルイコフ君の細君が貴方のところへ行つているそうじゃありませんか」と云つた。彼は、全体小柄で丸い胴の上にのつていてる健康らしい顔に、他意なさそうな笑いを漲らしながら続けた。

「一体どうしたんです？ ルイコフ君迎えにも来ないんですか？」

「……マリーナ・イワーノヴナが考へてゐる程に重大に思つていないんでしょう。大方」「へえ——何でそんなに衝突したんです？ ルイコフ君、浮氣でも始めたかなハハハハ」ジエルテルスキーは、聞き手がもうすっかり知り抜いているに違ひないのに、改めて、極めて自然に質問するので、礼儀上からでもそれに答えなければならぬ不愉快を忍びつつ、大略を話した。猫背に見える程ベルトを高いところで締めたアメリカ型の外套を着たまま椅子にかけている松崎は、陽気にふき出した。

「なあーんだ！ ハツハツ愚にもつかないことでいい年をしながら畦み合つてゐるんだな——それにしても、君んところ、狭いのに大変ですね」

「大変です、寝床低い、それだけ石油沢山いります」

日本語で云つて、ジエルテルスキーは額を赧らめ、内気に笑つた。マリーナが来てから、寝台を一人の女に譲つて、彼は畳の上で寝ていた。布という布をかけても、冬のとつつきの寒さで眼が覚めた。誰が代を払えるのか当のつかない石油がそれ故夜中じゅう、ストウブの中で燃やされるのであつた。

「いつまで置くんです？」

「さあ——今に帰るでしよう」

「どうも、何だな、そういう点が日本の女と外国の女の偉い違いだな、君、日本の女だつたら自分の夫に立て替えた金が返らないって、友達の家へころげこむ者は無いですよ、それに、置いてやるものもまあ無いね、私だつたら、どやしつけて帰してやる。ハツハツハツハツ、君は、義侠心が豊富だとでも云うのかなハハハハ」

「——私は頼まれると断れない氣質です——弱い——気が小さいです」

——外事課高等掛を友人に持つというのは、然し、何と鬱陶うつとうしいことか！ ジエルテルスキイは、故国にいる間絶えず種々な頭字を肩書に持つ友人に煩らわされた。外国へ来ると、その土地によつて、長かつたり、短かつたり、兎に角何等かの肩書ある知友を得ない訳には行かないのだ。

ダーリヤが、ビスケットの皿や砂糖を卓子に出すのを眺めながら、ジエルテルスキーは、「今日、松崎さんが来たよ」と云つた。

「へえ——」

「うるさいこと！」

マリーナ・イワーノヴァナが、大仰に顔を聾め、両手をひろげた。

「もう私がこちらにいることでも嗅ぎつけたんですよ」

六

三人は茶を飲み始めた。

「リヨーニヤ、明日お休み？」

「ああ」

「二週間ぶりね」

マリーナは黙つて砂糖をかきまぜ、その匙さじを受け皿の端へのせ、悠々くくり一杯飲み干した。

彼女は、自分が決して他の多くの者のように匙をコップにさしたままなど飲まないのが自慢なのであつた。ジエルテルスキーは、窓枠にのせて置いた黒鞄から、露字新聞を出して、マリーナに与えた。

「ああどうも有難う。——この頃の新聞は電報みたいですね、略字で端から端まで一杯だ」
 マリーナは、それを拡げた。ダーリヤは、ゆるやかな紅がちな縞の部屋着姿で、卓子にゆつたり両脇をのせ二杯目の茶を啜すすつっている。コップを持ち上げる毎に、寛い紅い袖がずっと深く白い腕が見えた。彼女の部屋着はもう着くずされている。それが却つて可愛ゆく、覆われている肉体の若々しい艶を引きたてるようであつた。——レオニード・グレゴリウイツチは、愛情をこめ、素早く妻を目がけ接吻を送つた。ダーリヤは、さつと肌理のこまかい頸筋を赧らめた。夫を睨んだ。が、娘っぽい、悪戯いたずららしい頬笑みが、細い、生真面目な唇にひろがつた。——マリーナは、彼女の顔の前にまだ新聞をひろげている。皆が飲み終る頃、二階じゅうを揺り動かして、羅紗売りのステパン・ステパノヴィイツチが、巨大な、髭むしや顔を現わした。

それを見るといきなり、マリーナ・イワーノヴナが飛びかかるように、「いかがです、貴下の五十三人目の恋人の御機嫌は」

と云つて笑い出した。

「いや、どうも——マダム。——いつも貴女のお口は鋭い」

ステパン・ステパンノヴィツチは、先ずダーリヤの手を執つてその甲に うやうや 恭々 しく接吻し、次いでマリーナにも同じ挨拶をした。

彼は絶えずけちな情事ばかり追い廻していると云うので、皆の物笑いになつてゐる独り者の男であつた。羅紗を売るのを口実にして、よその細君のところへ入り込むことも有名だ。マリーナ・イワーノヴナは、彼がどんな女にでも惚れるのを馬鹿にしながら、憎んでいなのは明らかであつた。彼女の浮々した毒舌に黙つて微笑しつつ、ダーリヤは、新しく来た客のために茶を注ぎ、寝台の上へ引込んだ。彼女は、自分の前で ひざまづ 跪いたり上靴へ接吻したりした男に、部屋着姿を見られるのを工合わるく感じたのだ。

「ねえ、ステパン・ステパンノヴィツチ、この頃、どなたか、私共の仲間の奥さんにお会いでしたか」

「一昨日、マダム・ブーキンにお目にかかりました——いつも美しい方だ——實に若やかな夫人です」

マリーナは肱で、ダーリヤの横腹を突いた。

「あの方は一遍、活動写真に映されてから、御自分の美しさに急に気がつきなすったんですね」

一つの角砂糖を噛んでステパン・ステパノヴィツチは三杯の茶を干した。

「ああ結構でした」

彼は、ジエルテルスキーに向つて頭を下げながら何か小さい声で云つた。するとジエルテルスキーは、例の手つきで髪をかき上げ、間の悪い曖昧な笑いを浮べてちらりと妻の方を見た。マリーナが忽ちそれを捕えた。

「え？ 何ですつて？ ステパン・ステパノヴィツチ、古いキャベジがいるからお茶が不^ま味かつたんですつて？」

「まるで反対です、美しい夫人がたとこの幸福な御家庭に祝福あれと云つたのです。然し、神はこの頃の流行でないから小さい声で云わなければなりません」

ステパン・ステパノヴィツチは暫くもずもずしていたが、軽てジエルテルスキーを引つぱつて台所へ入つて行つた。

「何だろう、え？ 何だろう」

立つて覗きそうにするマリーナを、ダーリヤは苦々しげに止めた。

「あとで、リヨーニヤが話してくれますよ」

障子の彼方側の板の間で、石油罐に足をぶつけながら、ひどく恐縮してステパンが上衣の内衣嚢から一通の手紙を大事そうにとり出した。彼は、ジエルテルスキーの耳に口をつけて囁いた。

「——実に恐縮です、実に厚かましい願いですが、今朝この手紙を受けとつたまま悲しいことに読めません。貴下にすがつて一つ読んでいただきわけには行きますまいか」

ジエルテルスキーは、意外な秘密に引きこまれる苦笑を洩しながら手を出した。封筒は桃色で四つ葉のクローヴアの模様が緑色で浮き出している。ジエルテルスキーはその模様を指した。ステパンは髭面を動かして頷く。^{うなずく}……中に、ステパンの会話の力で判断してだらう、片仮名で、

「オナツカシキペテロフサマ、

ソノゴオカワリモアリマセンカ、ユウベ、マティタノニキテクダサイマセン、ナゼデスカ、シドイシト、ワタシノココロモシラナイデ。アナタ、ホントニアタシガカワイイナラ、コノテガミツキシダイ、ヨルノ七時マデニ、イツモノトコロヘキテチヨウダイ、キツト、キツトヨ、デワ サヨナラ

コイシキコイシキ

ペテロフサマ シブヤにて

アナタノトヨ子 」

それは、いかにも滅多に手紙など書く必要のない女の字であつた。それも長いことかかつてひどい万年筆で書いたと見え、桃色の、やはり四つ葉のクローヴアのついた書簡箋が、ところどころ皺になつてさえいる。ジエルテルスキーの読む間、心配を面に表わして待つていたステパンは、愈々いよいよ一字一字意味を説明されると、見るも氣の毒なほど感動した。

最後の まで指して貰うと（尤もこのよりだけはジエルテルスキーの日本語の知識でも判読出来ず、トヨ子の自署の一種だらうと説明したのだが）ステパンは、幾度も幾度もその手紙に唇を押しつけ、再び自分の内衣囊にしまつた。そして、やはり囁き声で、ジエルテルスキーオの耳の中へ云つた。

「レオニード・グレゴリウイツチ、どうぞこのことだけは誰にも云わないで下さい。――

実に馬鹿気したことだ。私のようなこんな男が今更若い娘に夢中になるなんて――実に馬鹿氣たことです！ けれども、レオニード・グレゴリウイツチ、我々は、キリストを追放しつつレーニンの肖像を祭る。私にもマドンナがいる――マドンナ……ね、貴下は私の心が

わかつて下さる」

ジエルテルスキーは、自分にぴったり喰いついて熱心に光つていてるステパンの眼をさけるようにして頷き、境の障子を開いた。彼はステパンをどう扱つてよいか決心がつかず、いつも自分が彼とは全くかけはなれた者だと対手に思われるような態度をとるのであつた。

寝る前、マリーナが廊へ降りた間にダーリヤはレオニードを擁き、云つた。

「リヨーニヤ、月曜日に行けたらエーゴル・マクシモヴィイッチのところへ行つてらつしやいよ、ね？」

七

ジエルテルスキーの二階から、ギターとマンドリンの合奏が聞えている。マリーナは、寝台の上で膝に肱をつきその手で頭を支えながら、陰気にマンドリンを弾くエーゴル・マクシモヴィイッチを眺めていた。卓子は室の中央へ引出されて、上にパンや、腸詰、イクラを盛った皿が出ていた。底にぽつちり葡萄酒の入つてゐる醤油の一升瓶がじかに傍の畳へ置いてある。ルイコフが、彼のマンドリンと一緒に下げる來たものだ。ルイコフとマリー

ナはさつき大論判をしたところであつた。栗色の髪の薄禿げた、キーキー声を出すエーゴルは、ジエルテルスキイの言葉で、妻を迎えて来たのであつた。

「レオニード・グレゴリウイツチにもお気の毒だから、一先ずお帰り、——これこの通り、だまされしゃしない、半分だけ兎に角かえして置くから」

エーゴルはジエルテルスキイ夫婦の前で卓子の端から端へ十円札を十五枚並べた。

「いやです、あんたのですよ、誰がだまされるもんか、これだけで、あと半分はふいにしよう」と云うんです」

「返す、きつと来月中にはかえす」

「じゃそれまで待ちましょ。本当に、抑々 そもそもあなたの云うことを行に受けたばかりにこんなことになつてしまつた。——金はあるんですけども！ 勿論あるのさ。それをかくして置いて私のをへつるんでしょう」

「じゃあ、どうでもするがいい」

エーゴルは憤つてマンドリンをとり上げ、彼の声のように甲高な絃いとを搔きならした。

「さ！ レオニード・グレゴリウイツチ、久しぶりでどうです」

ジエルテルスキイは、戸棚からギターを出し一つ一つの響きを貪欲にたのしみながら調

子を合わせ始めた。間に、エーゴルは妻に向つて呟いた。

「あとの責任は私の知つたことじやないぞ」

マリーナが、夫の意味を諒解して、はつとする間もなく、

「さ 一つ『雪の野はただ一面』」

雪の野はただ一面白い……白い

灰色の遠い空の下まで。

——灰色の遠い空の下まで……

ボロン、ボロン、ギターの音の裡から、身震いするように悲しげなマンドリンの旋律が、
安葡萄酒と石油ストウブの匂いとで暖められた狭い室内を流れた。

私はきのう窓から見た

一人の旅人が、黒く行く姿を

足跡が深く雪に遺るのを……

階下の六畳では、行火(あんか)に当りながらせきがその音楽を聴いていた。うめはもう寝ている。
廁へ通う人に覗かれないように、部屋の二方へ幕を張り廻してあつた。継ぎはぎな幕の上

に半分だけある大きな熨斗^{のし}や、贊江^{さんえ}と染め出された字が、十燭の電燈に照らされている。げんのしようこを煎じた日向くさいような匂がその辺に漂っていた。

長く引つぱつて呻くように唄う言葉は分らないが、震えながら身を揉むようなマンドリンの音と、愁わしげに優しい低い音で絡み合うギターの響は、せきの渾^{しな}びた胸にも一種の心持をかき立てるようであつた。下町の人間らしい音曲^{ずき}から暫く耳を傾けていたせきは、軀て、顔を顰めながら、艶も抜けたニッケルの簪^{かんざしやけ}で白棄^{しや}に半白の結び髪の根を搔いた。

「全くやんなつちやうねえ」

思案に暮れた独^{ひとりご}言^{かたわ}に、この夜中で応えるのは、死んだ嫁が清元のさらいで貰つた引き幕の片^{ひだ}破ればかりだ。

「全くやんなつちやう」

今日風呂へ行くと、八百友の女房が来ていた。世間話の末、

「おばさんところの異人さん、いつお産です？ なかなかこれで二階をお貸しなさるのもお世話ですねえ」

そう云われた時、せきは自分の耳を信じられなかつた。

「え？」

「あの様子じやいぢれ近々お目出度でしようねえ。——でも西洋人の赤坊、キュー・ピーさんみたいで可愛いそだから、おばさん却つてお慰みかもしませんよ」

せきは、自分の迂闊さに呆れて、そこそこに湯をきり上げて来た。間借りに対してはいつもあれ程要心深い自分がどうしてそれに目をつけなかつただろう。日本服さえ着ていたら、どんなに隠したつて見破つてやれたのに！ せきは、異人の女のあの大きな白い体と、異人臭さ、手を洗わない事等を思うと、お産が、人間並みのお産で済まなそうに厭わしかつた。しかも、自分の頭の上で——フツ！ フツ！ それこそ七里しちりけつぱい。七里けつぱい。

——けれども、せきの困るのはここであつた。どうして体よく追い払おう。せきは、始めて言葉の通じない不便を痛感した。日本語でなら、うまく気を損ねないように何とでも云う法がある。男の異人の眼の碧さ、あの通り碧い眼をして、ひよめきをヒクヒクさせるだろう赤児と思うと、せきは異様な恐怖さえ感じるのであつた。

もう締めて横になろうとした時、計らず一つ妙案が浮んだ。自分の家の物干があもの、洗濯物の金盥を持つて、水口から登ろうと、二階から出ようと誰に苦情を云われる義理はない訳ではないか。五月蠅うるがつて出るのは彼方の勝手だ。——決心に満足を感じ、せきは

誰憚るところない 大欠伸を一つし、徐ろに寝床へ這い込んだ。

二階から聞えて来る合奏は、いつか節がかわつた。葡萄酒が少し廻つて来たジエルテルスキーとエーゴルは、互の楽器から溢れる響に心を奪われ、我を忘れてマズルカを弾いていた。ダーリヤとマリーナの頬は燃えた。二人の女は寝台に並び、足拍子を踏みつつ、つよく情熱的に肩を揺つて手をうつた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第三巻」新日本出版社

1979（昭和54）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第二巻」河出書房

1952（昭和27）年2月発行

初出：「女性」

1927（昭和2）年7月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2002年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

街

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>